

# 健常者の陸上競技大会との比較を交えた KOBE 2024 世界パラ陸上競技選手権大会トレーナー活動報告 A report on trainer's activities in KOBE 2024 paraathletics championships with comparisons to able-bodied athletics competitions.

加藤 基<sup>1</sup>、廣重陽介<sup>2</sup>  
Hajime Kato, Yosuke Hiroshige

<sup>1</sup> 帝京大学医療技術学部スポーツ医療学科

<sup>2</sup> 帝京大学スポーツ医科学センター

<sup>1</sup> Department of Sport and Medical Science, Faculty of Medical Technology,  
Teikyo University, 359 Otsuka, Hachioji, Tokyo, Japan

<sup>2</sup> Teikyo University Institute of Sports Science and Medicine

## Abstract

As I participated in the World Para Athletics Championships as a medical staff (trainer), I report on my activities. Para athletics is an athletics competition mainly for physically disabled athletes. Most of the competition rules are the same as those for able-bodied athletes, but there are some exceptions in consideration of disabilities. Medical relief activities were divided into four roles: headquarters medical office, FOP relief, practice site relief, and spectator relief. I was in charge of FOP first aid. In the FOP first aid at Para athletics, it was felt that attention should be paid to wheelchair events. I experienced two crashes with more than two rescue targets during the competition, and found it difficult to act quickly and appropriately even with training in rescue activities, and found much to reflect on. There are few reports on medical relief activities in Para athletics. We would like to make use of our experience in this activity to convey the necessary preparations and activities.

キーワード：パラ陸上競技、医療救護活動、FOP 救護

Keywords: Para athletics, Medical relief activities, FOP relief

## I. はじめに

2024年5月17日から25日まで、兵庫県神戸市で開催された世界パラ陸上競技選手権大会にメディカルスタッフ（トレーナー）として参加したため、その活動について報告する。なお、筆者らはこれまでに健常者の陸上競技大会におけるメディカルスタッフとしての活動を多く経験しているほか、TOKYO 2020 パラリンピックの陸上競技でもメディカルスタッフとして活動した。これらの経験との比較も交えて報告する。

## II. パラ陸上競技とは

パラ陸上競技は、障害のある人が行う陸上競技である。障害のある人が行う陸上競技は、聴覚障害者陸上競技、知的障害者陸上競技、身体障害者陸上競技に大別されるが、パラ陸上競技は主に身体障害者の陸上競技を指す。『パラ陸上競技』の『パラ』は、『パラリンピック』を表している。

健常者の陸上競技大会では、競走種目、競歩種目、跳躍種目、投擲種目、混成種目の5カテゴリーに分類される種目が開催されるが、パラ陸上競技では競走種目、跳

躍種目、投擲種目の3カテゴリーの種目のみが開催される。また、各カテゴリーで実施される種目もパラ陸上競技では少なく、健常者の陸上競技の種目にあるハードル種目や棒高跳、ハンマー投は行われない。主要な国際大会で実施される種目を表1に示す。パラ陸上競技だけにある種目には、こん棒投とユニバーサルリレーがある<sup>1)</sup>。

競技規則の大半は、国際陸上競技連盟（World Athletics：以下、WA）が定めたものが適用されるが、視覚障害者のガイドなど、障害を考慮した例外が定められている。

選手は障害の種別や程度によって、クラス分けされており、同程度の能力を持つ選手同士で競技が行われる<sup>2)</sup>。そのため、同一大会中に、同一種目がクラス別に何度も開催されている。クラス分けには、座位で競技を行うクラスが設けられており、特に車いすで競走を行うクラスがあることが、パラ陸上競技の大きな特徴であるといえる。クラス分けの概要を図1に示す<sup>3)</sup>。

Ⅲ. パラ陸上競技世界選手権大会について

世界パラ陸上競技選手権大会（以下、世界パラ陸上）は、国際パラリンピック委員会（International Paralympic Committee：以下、IPC）が主催し、IPCの一部門である世界パラ陸上競技連盟（World Para Athletics：以下、WPA）が担当して開催されている。

世界パラ陸上は、1994年にドイツのベルリンで第1回大会が開催されている。当初は4年ごとの開催であったが、2011年の第5回大会以降は、2年ごとの開催となり、パラリンピック前年と翌年に開催されている<sup>4)</sup>。

Ⅳ. KOBE 2024  
世界パラ陸上競技選手権大会

今回、活動したKOBE 2024世界パラ陸上（以下、本大会）は、当初2021年に開催される予定であったが、新型コロナウイルスの流行により、2度延期され、2024年5月の開催となった。世界パラ陸上が本邦で開催されるのは初めてのことであった。

本大会は、2024年5月17日から25日の9日間の日程で、兵庫県神戸市の神戸総合運動公園ユニバー記念競技場で開催された。各日とも午前（9:00～12:00）と午後（17:00～22:00）の2セッション制で開催された。

大会組織委員会によると、本大会には、約100カ国から、約1300名の選手が参加することが見込まれて開催準備がなされ<sup>5)</sup>、実際には104カ国、1073名の選手が

表1 健常者の陸上競技とパラ陸上競技の開催種目の比較

	健常者の陸上競技	パラ陸上競技
100m	○	○
200m	○	○
400m	○	○
800m	○	○
1500m	○	○
5000m	○	○
10000m	○	○
マラソン	○	○
100mH／110mH	○	—
400mH	○	—
3000m障害	○	—
20km競歩	○	—
35km競歩	○	—
4×100mR	○	—
4×400mR	○	—
ユニバーサルリレー	—	○
走高跳	○	○
棒高跳	○	—
走幅跳	○	○
三段跳	○	○
砲丸投	○	○
円盤投	○	○
ハンマー投	○	—
やり投	○	○
こん棒投	—	○

パラ陸上競技では、ハードル種目や棒高跳、ハンマー投は行われない。パラ陸上競技だけにある種目には、こん棒投とユニバーサルリレーがある。

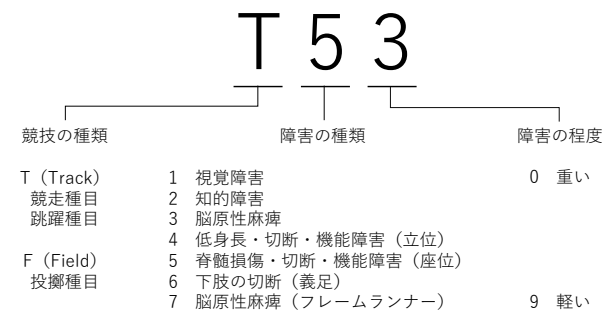


図1 パラ陸上競技のクラス分けの概要

クラス分けは、3文字で表され、1文字目が競技の種類、2文字目が障害の種類、3文字目が障害の程度を表している。

参加した<sup>6)</sup>。

本大会での開催種目数は 168 種目 (男 92 種目、女 75 種目、混合 1 種目) (表 2) であった。そのうち 21 種目 (12.5%) で世界記録が更新された<sup>6)</sup>。

9 日間での開催日程は、健常者の世界陸上競技選手権大会と同様である。しかし、9 日間全てで午前・午後の 2 セッションが開催された本大会に対し、2023 年にハンガリーのブタペストで開催された世界陸上競技選手権大会 (以下、ブタペスト 2023) では 2 日間は午前セッションがなかった<sup>7)</sup> ため、セッション数としては、本大会のほうが多かったことになる。ブタペスト 2023 には、202 カ国の 2187 名の出場した<sup>8)</sup> ことから、世界パラ陸上の参加者規模は世界陸上競技選手権大会の半分程度である。ブタペスト 2023 では、49 種目が開催され<sup>9)</sup>、男女各 24 種目と混合 1 種目であった。これと比較すると実施種目に男女差があることはパラ陸上競技大会の特徴である。このことは、クラス分けに該当する選手の有無に起因すると考えられる。ブタペスト 2023 では、世界記録の更新は 1 種目 (2.0%) であった<sup>9)</sup>。これと比較すると本大会での世界記録の達成率が高いことがよく分かる。このことは、新たなタレントの誕生と成長、パラ陸上競技に関わる環境の変化などが影響していると推察される。

## V. 本大会の医療救護活動の全体像

本大会の医療救護活動は、大会中に発生したアクシデ

ントへの対応をするために実施された。必要に応じて、近隣医療機関への紹介を行う体制を整えており、大会会場では、傷病者の発見、初期対応を実施した。

医療救護活動は、本部医務室、競技エリア (Field of Play: 以下、FOP) 救護、練習会場救護、観客救護の 4 つに役割を分けて行った。本部医務室が全体の統括を行い、FOP 救護及び練習会場救護では選手・関係者を対象とし、観客救護では FOP と練習会場以外において、選手・関係者を含む観戦者を対象として活動した。筆者らが経験した健常者の陸上競技大会や TOKYO 2020 パラリンピックでは、FOP 救護および練習会場救護と観客救護は別に組織・統括されることがほとんどであり、観客救護も合わせて実施する体制に参加することは、2019 年に神奈川県横浜市で開催された IAAF 世界リレー 2019 横浜大会以来、二度目のことであった。

それぞれの活動場所で、医師、看護師、トレーナーがメディカルスタッフとして活動した。参加したメディカルスタッフの配置と人数は表 3 の通りである。メディカルスタッフの参加日数は、数日～全日程とさまざまであり、活動場所や活動者はセッションごとに変更があった。そのため、活動者の変更があるごとに活動内容や方法の確認が必要であった。セッションごとの活動者の変更は、パラ陸上競技に限らず、TOKYO 2020 オリンピックなどの健常者の陸上競技大会でも同様に行われていることであった。

メディカルスタッフに対しては、事前にオンラインで活動前説明会が開催された。説明会では、本大会の医療

表 2 本大会での開催種目

### A.トラック種目

	T11	T12	T13	T20	T34	T35	T36	T37	T38	T44	T46	T47	T51	T52	T53	T54	T62	T63	T64	T72	複合	数
100m	男女	男女	男女		男女	男女	男女	男女	男女	男		男女	男	男	男女	男女		男女	男女	男女		31
200m	女	女	女			男女	女	男女	女			女	男						男女			12
400m	男女	男女	男女	男女	男		男	男女	男女			男女		男	男女	男女	男					22
800m					男女										男女	男女						6
1500m	男女		男女	男女					男		男			男		男女						11
5000m	男		男													男女						4
ユニバーサル リレー																					混合	1
走高跳												男						男	男			3
走幅跳	男女	男女	男	男女			男	男女	男女			男女						男女	男女			18

### B.フィールド種目

	F11	F12	F13	F20	F32	F33	F34	F35	F36	F37	F38	F40	F41	F46	F51	F52	F53	F54	F55	F56	F57	F63	F64	数
砲丸投	男	男女		男女	男女	男女	男女	男女	男	男女	男	男女	男女	男女			男	女	男		男女	男	女	30
円盤投	男女									男	女		女			男		女	女	男		男女		12
やり投			男女				男女				男		男	男女				男女		女	男		男	13
こん棒投					男女										男女									4

A. トラック種目、B. フィールド種目。本大会では 168 種目が実施された。クラス分けに該当する選手の有無などの理由から、男女で実施種目数に差がある。

救護活動の概要と方針が説明された。大会前のオンライン説明会は新型コロナウイルスの流行以前にはほとんど行われることがなかったが、オンラインミーティングの一般化に伴い、最近では実施されることが増えてきている。出務以前に活動概要や方針がわかると、心構えをしやすいため、活動前説明会の実施は望ましいことであると感じた。

表3 メディカルスタッフの配置数と参加者数

**A.活動場所別のメディカルスタッフ配置数**

	医師	看護師	トレーナー
本部医務室	2	2	5
競技エリア救護	3	2	16
練習会場救護	1	4	7
観客救護	1	2	0

**B.業種別の参加者数**

医師	看護師	トレーナー
26	10	52

A. 活動場所別のメディカルスタッフ配置数、B. 業種別の参加者数。

**Ⅵ. FOP 救護活動について**

筆者らは参加全日程で FOP 救護活動に参加した。

本邦において、パラ陸上競技大会で大掛かりな FOP 救護活動が行われるのは、2021 年の TOKYO2020 パラリンピック以来 2 度目のことであった。なお、TOKYO 2020 パラリンピックでの活動については、廣重ら (2022) に報告されている<sup>10)</sup>。

**1) 陸上競技大会の FOP 救護活動の特殊性**

陸上競技大会では、FOP に入ることができるのは選手と競技役員のみである、異なるチームに所属する複数の選手が参加している、複数の種目が同時に開催される、競技会場が広い、という 4 つの点で、他の競技スポーツと比べた特殊性を持っている<sup>11)</sup>。この特殊性はパラ陸上競技でも変わらない。また、FOP 救護活動に関する競技規則も健常者の陸上競技大会と同様の記述がある<sup>1)</sup>。

**2) パラ陸上競技大会の FOP 救護活動の特殊性**

競技としては、健常者の陸上競技と同様の特徴を持つものの、パラ陸上競技大会の選手に対しては基礎疾患を

持つ。そのため、対応時に移動時の介助や痛みなどの聴取に考慮が必要なが多い。アクシデント発生時には、必要な考慮も含め、迅速な対応ができるように、準備をする必要がある。この点については、本大会で発生したアクシデントとその対応について後述する。

**3) FOP 救護活動体制**

本大会では、FOP 救護活動では、図 2 のように競技エリア内の 4 箇所に FOP 救護班を配置した。図 2 の A と C には看護師 1 名とトレーナー 3 名が、B および D には医師 1 名とトレーナー 3 名が配置された。競技中の陸上競技場内での活動であるため、各班のトレーナーにはパラ陸上競技、健常者の陸上競技問わず、陸上競技会での活動経験の豊富なトレーナーが少なくとも 1 名配置された。各配置地点では、近くで行われている種目の観察とアクシデント発生時の対応を行った。

図 2 の E の地点には、2 名のトレーナーを配置し、競技後の選手がメディアから取材を受けるミックスゾーンと選手が着替えなどをして退場準備をするポストイベントコントロールの観察と対応を行った。

図 2 の A ～ E の各地点では、アクシデント発生時の初期対応と本部医務室への搬送を主たる役割と想定して活動準備を行った。

FOP 救護活動は図 2 の①に配置された統括医師により活動が統括され、図 2 の②(観客席)に配置された FOP スーパーバイザーによって配置場所や観察種目などの調整を受けることがあった。FOP スーパーバイザーは健常者の陸上競技会で FOP 救護活動の経験が豊富なトレーナーが務めた。

FOP 救護の各班と統括医師、FOP スーパーバイザーはトランシーバーによって連絡を取り合った。

FOP 活動体制は、健常者の陸上競技大会で行われるものと大きな違いはなかった。しかし、陸上競技大会での FOP 活動経験がまったくないもしくは少ない活動者も多く、陸上競技大会の FOP 救護活動の特殊性についてはもっと事前に周知されていても良かったと感じた。

**4) 活動前のトレーニング**

FOP 救護活動は各セッション前には、資機材の確認、班内の役割分担の確認をした後に、トレーニングを行ってから活動を開始した(図 3,4)。

トレーニングは、心肺停止状態の対応、頭頸部の外傷が疑われる場合の搬送、車いす競技のクラッシュを想定した対応などを想定して行われた。

本大会では、メディカル統括医師および FOP 救護に



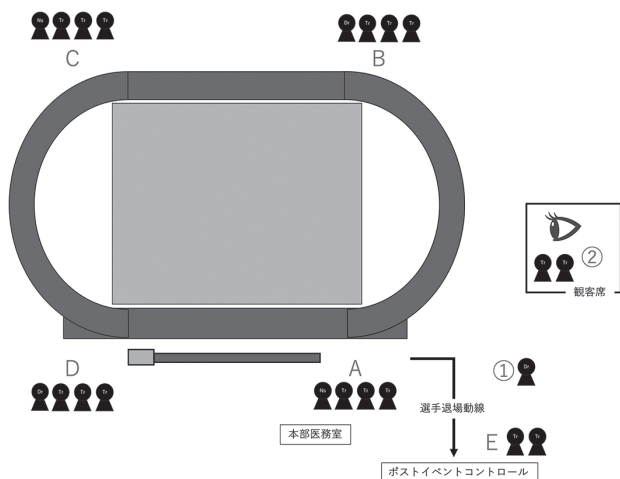


図2 FOP救護の配置

図中のA~DはFOP救護班、Eはポストイベントコントロールの救護班、①は統括医師、②は観客席から俯瞰的に観察するFOPスーパーバイザーである。図中のDrは医師、Nsは看護師、Trはトレーナーを指す。

参加する医師が受講しているスポーツにおける救命救急の資格である PHICIS (Pre-hospital Immediate Care in Sports) のコースで講習された内容を基準として活動を行ったため、活動前のトレーニングも PHICIS の考え・手順に沿って実施した。PHICIS は講習会の数も限られており、受講したものの完全に理解できていない活動者や未受講の活動者もいたため、PHICIS の考え・手順を基本とすることに若干の混乱があったことは否めなかった。しかし、全日程 FOP 救護に参加する活動者を中心に、より良いトレーニングが積めるように、シミュレーショントレーニングで想定するアクシデントを難易度の低いものと高いものに分けたり、トレーニング後の振り返りをうまくできた点、できなかった点の双方を確認するようにしたりするなどの工夫を行った。その結果、本大会の後半には、本大会の活動実態にあった活動前トレーニングを建設的に実施し、活動への不安を減じた状態で活動を開始できたと感じている。

パラ陸上競技に対する特別な対応として、車いすレースのアクシデント発生時に競技用車いすのまま転倒し、自力で出られなくなったことを想定した、車いすからの抜き出しトレーニングを実施した。車いすからの抜き出し時の配慮については確認することができたが、トレーニングに使用可能な競技用車いすはなく、搬送用車いすですトレーニングを実施していたため、実践的とはいえなかった。せめて競技用車いすからの抜き出しを示した映像資料だけでも用意されると良かったと感じた。

ある程度のトレーナー経験を積んでいたとしても、短

期間で繰り返し、実践的なトレーニングを積むことによって、自信を持ってできることとあやふやなところが明らかになってくることを感じた。学生の指導においても、当たり前でできると学生が感じてしまっていることも、場面や設定を替えてシミュレーショントレーニングすることで、実際にはできないことが明らかになるのだと思う。本大会での自身の経験と反省を踏まえ、学生指導に役立てていきたいと感じている。



図3 FOP救護の資機材

各FOPにAED、救急バック、搬送機材（車いす、スクープストレッチャー）、固定資材を用意し、活動場所に配備した。救急バッグ内には、バッグバルブマスク、挿管セット、骨盤ベルト、創傷処置セットなどが用意されていた。



図4 FOP救護の活動前トレーニングの様子

各セッション前に搬送やアクシデント対応のトレーニングを行った。

## 5) FOP 活動時の留意事項

FOP 救護活動時の留意事項としては、競技を妨げないこと、競技役員（いわゆる審判員）と適切に連携をすること、ともに活動するメディカルスタッフに適切に状況を報告することがある。これは、健常者の陸上競技大会と変わらないことであった。筆者らのような陸上競技大会での活動に慣れている活動者が率先して、同じ班での活動者にこの留意事項を伝えることが求められていた。慣れているものにとっては当たり前のことも、不慣れな人は適切に留意できないことがあるため、活動時の

確認が非常に重要であった。

## 6) 対応数

FOP 救護では、131 件（セッション平均 7.3 件）の対応があった。この対応数は、TOKYO 2020 パラリンピックよりも多かった。発生したアクシデントの詳細やアクシデント発生率、対応の詳細は、別の機会に報告すべく準備中である。

## VII. 主なアクシデントと対応

本大会中の FOP 救護活動中に発生した主なアクシデントとその対応及び反省を 4 件の事例を挙げて述べる。

### 1) 競技前の転倒

本大会初日に FOP に入場前の選手が転倒し、頭部を強打したとの情報が競技役員を通じて、メディカルスタッフに入った。発生地点が、練習会場と FOP の境界であり、メディカルスタッフは確認できていなかった。競技役員から連絡を受けて発生地点に急行したが、当該選手は立ち去っており接触できなかった。

その後、再び競技役員より、当該選手が出場する旨の連絡があったが、スタートラインに当該選手が立っていないことをトレーナーが視認し、統括医師に現状との相違を報告して、状況の確認を依頼した。確認の結果、当該選手は頭部強打の影響で脳振盪を起こし、嘔吐があったため、直前で出場を見合わせていたとのことであった。競技役員の監視下にあったもののメディカルスタッフへの連絡が適切に行われていなかった。確認後、メディカルスタッフが急行し、本部医務室に搬送した。

本件の発生により、練習会場と FOP の境界に追加でメディカルスタッフの人員を配置する措置がとられたが、アクシデント発生の可能性は低いところであり、競技役員との連携を強化するという対応でも良かったように感じた。競技役員との連携体制を構築することの重要性やトランシーバーを使用して適切に情報を伝えることの難しさと重要性を確認するきっかけとなったアクシデントであった。

### 2) 車いす 5000m レース中のクラッシュ

大会 2 日目に、車いすを使用するクラスの 5000m の、4930m 地点で多重クラッシュが発生した。このクラッシュでは 3 名の選手が転倒し、うち 2 名の選手の競技用車いすが破損し、別の車いすを使用して搬送することとなった（図 5）。この 2 名の選手は自力で競技用車いす

から脱出しており、搬送用への車いすへの移乗もほぼ自力で行えた。結果として、転倒した選手には大きな外傷・障害は発生していなかった。しかし、多重クラッシュが発生したことに多くのメディカルスタッフの気が動転し、対応開始時に一時的に適切な指揮命令系統が崩壊してしまった。経験を積んだメディカルスタッフが活動していても、いざ目の前でアクシデントが発生してしまうと適切な行動をすることが難しくなってしまう。特に、指揮者が冷静に対応できないと、全体に焦りが伝染してしまうため、FOP スーパーバイザーのような直接救護対象者に接触せず、冷静に全体への行動指示を行うことができるものの配置が重要であると強く感じた。



図 5 車いすのクラッシュ時の救護対応の様子

### 3) 車いす 100m のレース後のクラッシュ

車いす 100m のレース後に 2 台の車いすが接触・転倒した。最寄りの FOP 救護班が対応をしたが、転倒した車いすを起こしたり、選手を競技用車いすから抜き出したりすることに想定以上に時間を要し、状況の報告が途絶えてしまった。

一見、「ただ転んだだけ」に見えたことから、周囲の半からの状況の確認や自発的な応援ができず、対応に時間を要してしまった。

2) の事例同様、落ち着いて対応することの難しさを痛感する事例となってしまった。活動班からの報告が途絶えているときに、状況報告を呼びかけることによって、冷静な対応を促したり、報告が途絶えていることから対応の困難さを推測して応援対応を行ったりすることの必要さを感じた。しかし、これはマニュアルに落とし込みにくいことであると感じている。スポーツに対する医療救護に限らず、災害時の対応に関するガイドラインやマニュアルに精通している専門家とコンタクトを取り、どのように想定・対応することができそうかを検討したいと感じている。



また、前述の通り、競技用車いすからの抜き出しトレーニングを実際の競技用車いすで行えていないこともあり、戸惑いがあったことも否めなかった。

さらに、痛みや知覚鈍麻を訴える部位が元からの障害に起因するものなのか、このアクシデントで発生したものなのかははっきりせず、より慎重な対応が必要となった。この点については、救護対象の選手が英語でのコミュニケーションができなかったため、より難しさを感じた。

#### 4) カメラマンの卒倒

競技を観察している最中に、競技を撮影しているカメラマンの卒倒を目撃した。直ちに医師とともに駆けつけ、意識がないことを確認し、応援要請を行った。その後の呼びかけによって、覚醒し、見当識の異常がないことが確認できた。なお、卒倒時に頭部を打っていないことも視認できており、転倒に伴う外傷は除外して対応した。駆けつけた医師が脈拍の触知から血圧に大きな異常がないことを確認したが、失禁が認められ一時的に完全に意識を消失したと考えられた。対応を行いながら、状況報告と応援要請を行い、本部医務室から応援に駆けつけたメディカルスタッフによってストレッチャーで本部医務室に搬送された。その後、熱中症疑いで救急搬送された。

選手を対象とした対応ではなかったが、特異な状況であっても、状況の報告や応援の要請を適切に行えた事例だったと感じた。あとから振り返った際に、救護対象のカメラマンと共に活動をしていた方に、救護対象者に関する情報を聞き取ることができていただろうと反省をしている。さまざまな想定をしていても、完全にできていないことがでてしまうため、さまざまな事例を蓄積し、それを題材としたシミュレーショントレーニングを高頻度に繰り返し実施する必要があると感じた。

### VIII. パラ陸上競技の救護活動に関する所感

筆者らは、健常者の陸上競技大会での救護活動を多数経験してきたため、あまり戸惑うことなく参加することができた。しかし、パラ陸上競技の救護活動に参加するのは二度目のことであり、幸い救護対象者の生命に大きな危険が迫る事態はなかったものの、パラ陸上競技の特殊性の中で最善の活動ができたとは言い難かった。各対応ごとに、どう行動するのが理想的であったか、理想的な行動を選択できなかった理由にはどんなことが考えられるかをすぐに議論し、翌日以降の活動に反映させるこ

とができたことは良かった点であると感じる。この経験を自身たちの経験だけに留めることなく、広く共有するとともに、適切にマニュアル化して、今後の活動に活かしていきたいと考えている。

健常者と異なるパラ陸上競技大会のアクシデント発生の特徴として、車いす種目では、①アクシデントで複数の救護対象者が発生する、②アクシデント発生時に、特別なサポートが必要になる、③動きから、ここで痛めたのかがわかりにくい、という点があると感じた。活動を経て、よく考えれば当たり前のことではあるが、活動前に言語的に整理できていなかったことであり、今後の活動時には他の活動者にも伝え、あらかじめ注意をできるように心がけたい。

廣重ら(2022)にあるとおり、パラ陸上競技に関する医療救護活動の報告は極めて少ない<sup>11)</sup>。本大会には、どの種目でどの程度アクシデントが起こるかを記録し、今後のパラ陸上競技大会での医療救護活動より体系化するための資料を得ることを目指して、活動に参加していた。本大会でえられた知見をまとめ、関係者とより深く協議をすることで今後に活用しやすい医療救護活動のガイドラインを作成したいと考えている。

これまで、多くの健常者の陸上競技大会において医療救護活動に従事してきたが、活動に慣れるほどに無意識的に実施している活動・行為が増えていったことを本大会への参加によって強く感じることもできた。本大会には、陸上競技大会での活動に不慣れなメディカルスタッフがいたことや筆者ら自身がパラ陸上競技大会の医療救護活動の特徴の理解が乏しかったことがそのように感じるきっかけであったと思う。2025年秋には東京でデフリンピック(聴覚障害者の総合競技大会)が開催されるため、本大会の経験を踏まえ、参加する選手・関係者の安全を担保するために、全メディカルスタッフがより充実した準備と活動ができるように貢献していきたい。

### IX. 大会を楽しむこと

9日間の活動は決して短いものではない。緊張感のある活動をするためにも、休憩時間には大会グッズを購入したり、大会に合わせて日替わりで出店しているキッチンカーを巡ったりと大会を楽しむことを心がけた。

筆者らは2007年に大阪で開催された世界陸上競技選手権大会でも活動しているが、そのときのことを思いかえすと活動に必死で、このようなゆとりが無かったと思う。長く緊張感のある活動を無理なく、楽しく過ごすためこのような余裕を持つことは重要だと感じる。この

ようなことを報告する機会はあまりないため、ここに記録するとともに、学生にも機会を見つけて伝えていきたいと思う。

## X. 今後の活動に活かしていきたいこと

筆者らは、競技大会時の FOP 救護活動の重要性を訴える活動をしている。アクシデントは起こってしまうことの事例として報告するとともに、どのような対応が適切であるかを常に考え続けることの必要性を継続的に発信していきたい。

経験があるにも関わらず、うまく対応できないことがあり、打ちのめされる気分も感じた本大会であったが、自身で猛省するとともに、学生に救護活動の重要性と適切に行うための準備・トレーニングの必要性を伝えていきたいと感じた。とくに、「できない」に直面するシミュレーショントレーニングは重要だと考えている。もちろん、「できない」を「できる」に変える安心感と達成感を得られるように、段階的課題設定や教示をすることも必要であり、教員としての責務であると感じた。アスレティックトレーナーを目指す学生のスポーツ現場実習などで、実践できるように準備していきたい。

## XI. 謝辞

大会に参加する機会をくださった大会組織委員会、参加にあたり長期の出張のご許可をくださった帝京大学、複数回の休講とその事後対応を許してくれた学生諸氏、新たな興味関心を引き出してくださったパラアスリートの皆さんに感謝申し上げます。

利益相反自己申告：申告すべきものはなし。

## 参考文献

- 1) 一般社団法人日本パラ陸上競技連盟. “競技規則及び規定 2024 (英語原文—日本語訳対比版)”. 一般社団法人日本パラ陸上競技連盟. [https://para-ath.org/pdf/committee2/WPARule2024\\_einichibaneinichib\\_ver6.pdf](https://para-ath.org/pdf/committee2/WPARule2024_einichibaneinichib_ver6.pdf), (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 2) 一般社団法人日本パラ陸上競技連盟. “クラス分け”. 一般社団法人日本パラ陸上競技連盟. <https://para-ath.org/sports/basic-knowledge#rule>, (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 3) 一般社団法人日本パラ陸上競技連盟. “わかりやすいクラス分け”. 一般社団法人日本パラ陸上競技連盟. [https://para-ath.org/pdf/top/classwake\\_qa\\_rr.pdf](https://para-ath.org/pdf/top/classwake_qa_rr.pdf), (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 4) 神戸 2024 世界パラ陸上競技選手権大会組織委員会. “世界パラ陸上競技選手権大会とは”. 神戸 2024 世界パラ陸上競技選手権大会. <https://kobe2022wpac.org/about/>, (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 5) 神戸 2024 世界パラ陸上競技選手権大会組織委員会: “大会詳細資料”. 神戸 2024 世界パラ陸上競技選手権大会. <https://kobe2022wpac.org/wp/wp-content/themes/wpa/library/pdf/details.pdf>, (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 6) 神戸市. “【報告】神戸 2024 世界パラ陸上競技選手権大会の開催結果について”. 神戸市. [https://www.city.kobe.lg.jp/documents/69840/20240618houkoku\\_bunka.pdf](https://www.city.kobe.lg.jp/documents/69840/20240618houkoku_bunka.pdf), (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 7) World Athletics. “Timetable”. World Athletics. <https://assets.aws.worldathletics.org/document/64da68f685013c1f59823371.pdf>, (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 8) World Athletics. “Athletes by event and season best”. World Athletics. <https://assets.aws.worldathletics.org/document/64d4e7bd5a1af21c67383081.pdf>, (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 9) World Athletics. “World Athletics Championships, Budapest 2023”. World Athletics. <https://worldathletics.org/competition/calendar-results/results/7138987>, (参照：2024 年 8 月 20 日).
- 10) 廣重陽介, 加藤基, 武井隼児, 山田陸雄: パラリンピック陸上競技における救護活動の留意点. 陸上競技学会誌 20(1): 105-110, 2022.
- 11) 廣重陽介, 加藤基: 陸上競技における競技エリアの救護活動の展望. 陸上競技学会誌 21(1): 69-76, 2023.

(受理日 2024 年 9 月 3 日)